B-29 実験動物として開発された各種系統マウスに対するワルファリンの毒性

○村田義彦・川上 泰・内田明彦（麻布大・環境生物）

谷川 力（麻布大・環境生物，イカリ消毒）

The toxicity of 0.025 % warfarin to some strains of laboratory mice
Murata Y., Kawakami Y., Uchida A. and Tanigawa T.

野生および一部の系統マウスではワルファリン感受性に個体差があると報告されている（Rowe and Redfern, 1964, 1965）。今回、本邦で標準的な5系統（DDY, ICR, C3H, BALB/c, MCH）のマウスを供試して、それらのワルファリン感受性を調べた。各系統とも雌雄10匹（8週齢）ずつ供試し、1匹ずつのケージ飼いで、0.025%ワルファリン含有飼料を死亡するまで連続して自由摂食させた。

中央致死日数は、ICR, MCH が5.0, 5.8日、C3H が 8.4日、DDY と BALB/c は11.0, 15.0 日であった。また、95%致死日数は MCH, ICR, C3H が 9.0 - 12.0 日であるのに対して DDY と BALB/c は20.0, 30.0 日であった。

以上の結果から、BALB/c と DDY は比較的低感受性であり、しかも個体間にバラツキがあることが示された。

B-30 ホウ酸製ゴキブリ駆除剤の病棟への応用（2）

○村主節雄・ 原田正和（香川医科大学医動物学講座）

Application of a boric acid expellent for control cockroaches in a
hospital(2).

Suguri S. and Harada M.

香川県下のある病院において市販の30%ホウ酸澱粉製剤（アルタンドンドン）を用いてゴキブリの駆除を1986年より試みている。駆除製剤は原則として年一回設置し、粘着トラップにより、ゴキブリ指数を求めた。全棟を通じてゴキブリ指数の変化を見ると食物のある地階・一階・二階喫茶部は1以上10程度であった。それ以外の病棟では大体0.1以下を保っているが、駆除剤設置から一年半ぐらい経過すると0.3程度に上昇し、製剤の再設置により0.01程度まで下がるというパターンを繰り返している。また、食物を扱う場所では業者に依頼してフェニトロチオン、ジクロロボスの散布をし、駆除指数90と非常な効果を上げている。以上のごとく食物を扱う地域は薬剤散布による駆除を併用し、病室においてはホウ酸製剤による駆除により一応の成功を見ている。